2009年度 国際交流基金賞 授賞式

受賞のことば

2009年度「国際交流基金賞」授賞式が10月6日にホテルオークラ東京で行なわれました。翌日に天皇皇后両陛下の御接見を賜った受賞者3名の方々の授賞式でのスピーチの概要をご紹介いたします。

国際交流基金賞 ● **文化芸術交流部門**

ボリス・アクーニン Boris Akunin

（本名：グリゴーリィ・チハルチシヴィリ）作家【ロシア】

皆さまの国、日本は、私を含めた多くの外国人から、発見される何かをもっていると思います。言葉を学び、その国のことを学び、その人々のことを知ると、いつのまにか日本と恋におちないわけにはいかない、ということになっているのです。

日本の専門家であるためには、何よりも、まず第一に、日本に対する自らの愛情を自分の国の言葉に翻訳することでかたちにし、自国の人たちに、その気持ちを共有してもらえるようにすることが大切だと思います。

もっとも、真の日本専門家である、今回の私以外の受賞者お二人を前にして、私は日本を研究することのなんたるかを語るにふさわしい人間であるとはとても言えません。というのも、10年前に私は日本の専門家であることをやめて、より安易な方向に進み始めたからです。お二人の前では私は脱走兵か修道院から追われた修道僧のような気がしてならないのです。

この10年で、日常的な日本語を使うこともなく、日本語もこころもとないものとなり、日本文学の専門家としての資格をすっかり失ってしまいましたが、日本に対する愛情は、もはや病膏肓に入るとでもいった域に達してしまいました。この病は、いったんかかると、もはや治癒は望めません。

私は、日本への愛情をこめて推理小説を書くことで、文学作品を翻訳する以上に、日本好き病とでもいうべきこの病を広めることができるのではないかと思いました。大衆文化というものは、きわめて広範な人々にそれを伝えることができるものです。恋の病は、伝染性のものかもしれず、大流行を引き起こすかもしれません。

国際交流基金賞とは

国際交流基金（ジャパンファウンデーション）では、1973年以来、毎年、学術、芸術、その他の文化活動を通じて、日本に対する海外の理解、或いは日本人の対外理解を深め、国際相互理解・国際友好親善を促進することで、国際文化交流に特に顕著な貢献があり、引き続き影響力が大きいと認められる個人・団体に「国際交流基金賞」を授賞しています。

国際交流基金賞●日本語部門

全米日本語教師会連合

Alliance of Associations of Teachers of Japanese [AATJ]

代表：スーザン・シュミット〔事務局長〕【米国】

アメリカで、日本語教育が始まったのは、第二次世界大戦の終結後にさかのぼります。日米両国の関係が緊密なものとなって、両国の国民が互いを友人や仲間と思うようになり、学生たちがお互いの文化について学び合うようになってからのことでした。

1963年に、アメリカで初めて日本語教師の組織が発足したときには、ほんの数十名の大学の教師が日本語や日本文化を教えているといった程度でした。学生もせいぜい数百人しかおりませんでした。

やがて日本語を学び始める学生も増え、今日では、6万6000人以上の大学生が日本語を学んでおり、毎年そのうちの5000人以上が留学をしております。

約25年前から、一部の小中学校でも日本語を教えるようになりました。今では、8万人以上の小中高校生が日本語を学んでいます。これに加えて、1万5000人が地域のコミュニティスクールや、日系アメリカ人向けの土曜学校で日本語を学んでいるのです。

この学生・生徒たちを教える教師の側も実に多様です。大学院生に日本文学を教えている人もいれば、コミュニティスクールで、子どもたちに教えている人もいます。こうした先生方が、全米で3000人以上おられるのです。

私の所属する全米日本語教師会連合は、こうした日本語の先生方をまとめ、必要な支援を行なうとともに、アメリカの教育を取り巻く厳しい条件のなか、日本語の教育者の声のとりまとめをすべく、活動をしています。

全米日本語教師会連合は、全米の日本語教育界を代表して、懸命な努力を続けておりますが、他国同様、アメリカにおいても、日本語教育が成功を収めてきたのは、人に恵まれたからであります。

漫画、アニメ、書道、日本庭園、厚底のヒールの靴を履いた渋谷の少女たちのことが大好きな学習者たち。日本の詩や音楽の響きに魅せられた学習者たち。自分の祖父母が家で話していたから日本語が大好きだという学習者たち。日本語は特に難しいから好きなんだという学習者たち。そんな言葉が日々使われている素敵な国に行ってみたい、そこで勉強したり働いたりしたい、という学習者たち。

そして、そうした学習者たちが、日本語を話したり、読んだりしようと、必死に勉強し、この難解で複雑でおもしろい言葉と格闘するのを、懸命に助けている日本語の先生たち。

そうした日本語の先生方とともに仕事をする機会を与えられたこと、そして、そうした方々を代表して、本日ここに出席させていただけたことに、心から感謝しております。どうもありがとうございました。

これまでも、日本好き病という私のこの病に対して、日本の立派な機関から、賞をいただいたことがありましたが、そのたびごとに、私は、なんとも申し訳ない気持ちに襲われておりました。自分が好きでやったことなのだし、その行為自体が、自分にとっては賞のようなものなのに、それに対して何かをいただけるなんて、という気がしたからです。

今回の受賞もまた、大変ありがたいことで、身に余る光栄です。私のほうが、よほどお礼を申し上げなければなりません。どうもありがとうございました。

国際交流基金賞●日本研究・知的交流部門

アーサー・ストックウィン Arthur Stockwin

オックスフォード大学日産日本問題研究所前所長【英国】

授賞式での記念撮影。左よりジャパンファウンデーション理事長の小倉和夫、「国際交流基金賞」受賞者のボリス・アクーニン、スーザン・シュミット、アーサー・ストックウィン、選考委員会座長の宮内義彦の各氏

このたび、国際交流基金賞を受賞することになり、大変光栄に存じております。受賞は、まったく予期しておりませんでしたので、お知らせをいただいたときには、本当に驚いてしまいました。この賞は、オックスフォード大学、そして、英国のその他の大学において日本研究に携わっている方々を代表してお受けするものと思っています。

この20～30年、学生の指導と教育、そしてさまざまな分野における研究活動、日本に関する出版物の発行の促進などを通じて、英国における日本研究の発展のために、我々は努力をしてまいりました。また、相互交流、特に学術交流の面で、日本の研究者や高等教育機関との交流に努めてきた次第です。

妻と私が初めて日本に参りましたのは、もう47年以上も前の1962年の1月のことでした。そのときは、まだ成田空港はなく、三重県四日市の港に到着しました。早朝のことでしたが、オーストラリアで生まれて6週間の赤ん坊だった娘と一緒に、船のデッキから見たのは、雪に覆われた美しい山々でした。

私たちは、そのとき、15カ月のあいだ東京に住み、多くのよい友人を得て、戦後の経済成長初期のダイナミックな変化の真只中にある日本を経験しました。当時、東京郊外の家屋の多くは木造で、地下鉄は銀座線と丸の内線しかありませんでした。そして、普段の移動は、都電といわれる遅くて騒音のうるさい交通機関によるほかなかったのです。高速道路は建設が始まったばかりで、新幹線もありませんでした。

私たちは、1959～60年の日米安保条約改定の混乱の直後に、日本にやってきました。その後の64年の東京オリンピックは、日本の国際的地位の向上に大きな役割を果たしました。

私は、日本の政治と外交政策の研究に進みましたが、日本の皆さんが、あの戦争の傷跡を乗り越え、自国の新たな国際的な立場を確立しようと懸命になっている姿を目の当たりにして、大変感銘を受けました。その気持ちは、それ以後もずっと忘れることができません。

英国における日本への関心は、時に思わぬ方向に進むことはあるものの、質的にも量的にも、大きなものとなっています。学生は、20年ほど前は、奇跡的な経済発展の秘密への関心から日本に関心をもったものでした。現在では、ポップカルチャーへの関心から、日本について学ぶことも多くなっています。

しかし、その動機こそ変われ、日本、日本人、日本語、日本の歴史や文化、日本の諸制度に対する関心は、強固なものとなっています。英国の人々の意識に深く日本を根付かせる努力にかかわることができたことは、私の非常な喜びとするところです。このたびは、本当にありがとうございました。